

トルコ サバンジ大学

スクール・オブ・ラングエッジ

機関報告 (2013年10月現在)

橋本 実子 (サバンジ大学)
jitsuko@sabanciuniv.edu

1. 機関概要

Sabanci University

Address: Sabanci Universitesi Orta Mahalle, Universite Caddesi No: 27 34956
Tuzla-Istanbul/TURKEY

Phone : 0090 (216) 483 9000

Fax : 0090 (216) 483 9005

URL : <http://www.sabanciuniv.edu/en>

1995年創設。トルコの財閥のひとつであるサバンジによる財団により運営されている私立大学である。世界に通用する大学を目指し創設されたこともあり、トルコ国内の中では比較的高レベルに位置し、学生たちのレベルも高い。また国内センター試験の結果により学費免除等もあるため(通常は年間約180万と高額)、学費免除により在学している学生たちはその年の国内1000位にはいるような優秀な成績を保持している。

学部としてはFaculty of Engineering and Natural Sciences、Faculty of Arts and Social Science、School of Managementの3つの学部があり、それに付属してSchool of Languagesとよばれる英語予備教育および選択授業としての他言語教育をまとめた機関がある。日本語はそのSchool of Languagesの中に位置し、選択授業としての授業を行っている。

立地としてはイスタンブール郊外に位置し、中心地からは大学専用のシャトルバスで行き来するほかないような陸の孤島にあるため、学生の多くは学内にある寮にて生活する。大学生徒数は約3000人と少なく、キャンパス内では誰しも顔を会わせることができる規模の大学である。

2. 大学内での言語教育の位置づけ・現状とその問題

学内での授業はほぼすべて(トルコ語の授業などをのぞく)英語で行われるため、入学時に大学独自の英語の試験があり、その成績によって学生たちは半年もしくは1年の予備教育を受ける。予備教育は週20時間(1日4時間×5日)、各レベルに合う形で行われ、ライティング・リーディング等みっちり勉強するため、その後言語学習を受け入れやすいといえる。

大学内では12国語の授業が行われ、内訳はスペイン語(講師3名)・ドイツ語(2名)・イタリア語(以下講師各1名)・フランス語・ロシア語・中国語・ラテン語・アラビア語・ペルシア語・オスマン語・クルド語・日本語である。しかし、外国語はすべて選択授業であり、必修ではないため、選択する生徒数は少ない。

また学期ごと20単位分の授業を選択できるシステムで、そのうちの多くを必修で使う1・2年生は選択したくとも選択できない場合が多く、授業プログラムとしては8学期(秋・春×4年)選択が可能とされるが、実際は各生徒通算2年程度の習得がやっとである。

設立当初(日本語は2006年より開始)より2012-2013年度までは各言語週3時間(1時間+2時間、各コマ50分)であり、学期内に12~13週あったとしても試験等でつぶれるため、実際の授業時間は1学期30時間ほどしかなかった。

しかし、それでは1学期でまったくなにも教えられないため、日本語を始め各外国語講師の強い希望により週5時間(2時間+3時間)の授業が実現し、今年度より1学期50時間程度の学習が可能になった。

求められる教育水準としてはヨーロッパ言語が多いこともありCEFR基準が採用されている。しかし日本語教育の現状および講師のシラバスとマッチしないため、難しいことも多い。

また、アセスメント基準も同様に考えられるため、初級レベルでもオラルアセスメントのパーセンテージが高く設定されているなど、日本語との摩擦が生じている。これに関しては講師が状況を説明するなどし、初級レベルでは日本語のみ語彙・文法などのパーセンテージを多くするなど対処している。

アセスメントの方法なども、英語に関しては試験専門の教員が在籍するため、アドヴァイス等を受けることも可能であるが、やはり英語と日本語の現状や問題点、フォーカスすべき点などが違うため、そのまま採用することはできない。

アセスメントについても、今後考慮していく課題であると思っている。

3. 学内での日本語教育の現状

日本語教育は2006年から開始され、当初はから2012年春まではトルコ人講師1名が在籍し、その辞任後2012年からは日本人講師1名が授業を受け持っている。

前講師より引継ぎがなく資料も残っていなかったため、詳しいことに関しては不明であるが、引き継いだ生徒からの資料によると、2012年春までは「みんなの日本語」やそれを基本とした自作教材などを採用し、8学期(約240時間)でみんなの日本語を終えるプランが作成されていた。しかし、それでは2年間勉強してなお、可能形などを学習するにいたらない等の問題があり、2012年秋より担当する授業においては、教師が自作したシラバスに対応する自作教材を使用している。それについては今後の連絡会議で報告していきたいと思っている。

前年度までは一学期30時間程度であったにもかかわらず、学内のレベル枠としては2学期(60時間)で初級、4学期で初中級、6学期で中級という位置づけがされていた。しかしながらヨーロッパ言語においても3学期の半ば(80時間)でA1到達ということを目指されていたため、学科のコードと内容・レベルはまったく一致しなかった。

また、日本語では短時間で初級到達と言い切ることが不可能だということを示唆したものの、各言語との摩擦によりどうしても3学期90時間にて初級レベル(N5レベル)到達を目標とされ、講師がそれを4学期(120時間)にのぼしたとしてもかなりの詰め込み教育をする必要があった。

本年度からは1学期50時間になったことものの、各学期による目標到達レベルについては変更がなかった。そのため日本語としては3学期150時間を初級としN5レベルの語彙・文法習得を旨とし、生徒たちの最終目標レベルは5~6学期(250~300時間)の授業にてN4程度の語彙量と文型、プラスN3からいくつかの使いやすい文型を習得する、となっている。

4. 選択授業としての日本語、学生たちのニーズ。

講師として感じられるのは、大学が確固たる意味づけを持って多言語教育を行っているのではなく、「なんとなくいろんな機会があったほうがいいから」といった考えから設置されているのでは、ということ、それは非常に残念なことだと思っている。

昨年度赴任以来、「大学における選択授業としての日本語教育とはどうあるべきか」ということを考え、学生たちのニーズ、またアウトカムはどうあるべきかということを考えながら授業シラバスの作成を行ったり、授業外活動を行っている。

講師の一存としては、たとえ選択授業であろうとも大学内の授業であるかぎり、「趣味の講座」にしたくないと考えている。そのため、去年より今年にかけて生徒の間で「日本語は簡単に取れる単位ではない」という認識が広まったようだが、そのおかげで本当に勉強したい生徒のみが選択することになり、少人数のクラスではあるが比較的すべての生徒のモチベーションは高くなったといえる。

また、日本語講師として生徒や大学にできることは何かと考え、日本に留学する生徒のフォローなども行ったり、交換留学についての情報等も収集・配布している。

大学には、多種の交換留学プログラムがあり、その中には日本の大学も含まれている。また大学間・講師間の交流によるインターンシッププログラムなどもあり、短期間日本で学習する生徒たちもいる。

交換大学やインターンシップに求められる言語は主に英語ではあるが、やはり簡単な日本語ができたほうがいいということがあり、授業を選択する生徒もいる。また、短期留学から戻った後「日本が気に入ったから」「文部省奨学金に応募したい」などの理由から再び日本語を選択する生徒もいる。

5. 授業外活動

当校と日本の大学間には交換プログラム等がいくつかあるものの、その数は少なく、やはり生徒の目はアメリカやヨーロッパに行きがちである。そういった中で、さらに日本での学習のチャンスを増やすべく、情報収集や学内でのやりとりを援助する等の活動を行っている。

また、学内に「日本クラブ」があるものの、現在ではあまりアクティブな活動を行っているとはいえないため(アニメを見たり日本食を食べにいたりしているだけ)、今年度は、日本に関する情報を集めさせてパネルセッション・ポスターセッションをしたり、日本食を作るワークショップ、習字・折り紙等のワークショップもしていければと思っている。

こういったことは講師の有志によるところが大きいですが、いずれそれらが日本語学習への動機付けになればと思っている。

6. 終わりに

現在、講師は「いかに良い授業をするか」ということだけに専念できず、生徒数確保の問題や、校内での日本に関することはすべて日本語講師に、といった雑務に追われていたりする。しかしながら、それが今後の学内での日本語教育に生きていくのではないかという思いから、講師はただ日々奮闘するばかりである。